

八尾市の観光戦略に関する一考察

森榮 徹

A discussion of the tourism strategy of Yao-City

Toru MORIE

目 次

1. 観光大使
2. 奈良市からやって来た八尾市観光団
3. 古墳を手掛かりに歴史観光を考える
4. 八尾市の観光戦略を考える

キーワード：観光大使、迎え入れる観光、歴史観光、観光戦略

要旨

いくつかの観光大使としての経験をもとに、八尾市が観光地として観光客を受け入れる立場に立っての観光戦略を考えてみた。国際観光文化都市として有名な奈良市と八尾市を対置して考えるのは、あまりにも無謀、乱暴と受け止められるに違いないが、河内音頭の文句に出てくる「大和、河内の国境」である信貴生駒、高安山系を挟んで隣り合う関係からすれば、極めて日常的な文化論である。いずれの歴史が古いかどうかを言い出せば、偏狭な地域エゴイズムに墮する危険性もあるが、京都以降の歴史が浅い地域から見れば無縁の領域ではあるが、史家による大胆な見直しと評価によって克服できる問題である。出かける側の観光者にとっては、行ってみたいという動機形成に大きな意味を持つことになり、まやかしではない宣伝活動が期待されるところである。それはともかく、八尾市がただ今現在保有する観光資源とインフラストラクチャーをどう活用するかが問題である。極々ささいな観光事例を素材として、八尾市が持つ観光都市としての可能性と発展性に関して、大胆な議論があったことを簡略に報告したい。

1. 観光大使

筆者は奈良市観光大使、遣島使、飛鳥応援大使と3つの肩書きを持っている。

奈良市観光大使は2003年、新聞社の奈良支局長から転任する際、当時の奈良市長から委嘱された。「新しい任地に赴いても奈良を忘れず、観光宣伝に努めてください」との趣旨で、それ以上の責務は伴わず、定期的に広報紙誌が送られてくるだけで、格別の特典があるわけではない。

遣島使は「遣唐使」をもじって「唐」の部分で鳥根県の「島」に置き換えた命名である。県内出身者または同県にゆかりを持つ人が「県の良さを広くPRする」活動を担うものだ。記者としての初任地が松江市であったことから、すでに遣島使であった知人に推薦され、2008年に委嘱を受けた。これも義務的業務があるわけではないが、県立の美術館、博物館等の施設を無料で観覧できる特典がある。

飛鳥応援大使は公益財団法人「古都飛鳥保存財団」に属し、「もっともっと飛鳥大好き人間になる／一人でも多くの飛鳥ファン獲得をめざす／飛鳥保存関連イベントの広報に努める／ボランティア精神とフレンドシップ精神を発揮し活気ある飛鳥をつくる」のが任務だと謳われている。いずれもが飛鳥応援大使である日韓の芸術家グループに協力して2013年秋、韓国忠清南道扶余郡にある定林寺址博物館で「부여에서 아스카까지 (From Buyeo To Asuka)」と題した扶余郡と明日香村共催の展覧会を開く際、筆者も同じ肩書きである方が説明しやすいとの理由で応募した。折から両国の外交関係が悪化しつつあるなか、芸術家たちは「文化の流れは一方的ではなく、必ず還流する」との思いで、扶余と飛鳥の両地域にいまも存在する絆をテーマに、工芸、絵画を制作し、筆者は明日香村の風景や石造物を紹介する写真約50点を出品した。

芸能人や著名人が観光大使に選ばれることはよく知られているが、一般の人が「ふるさと親善大使」として選ばれることも珍しくはない。前者はマスコミュニケーションを介した訴求効果に期待し、後者は地道な口コミ戦略である。筆者が務める3例も後者に属するが、元新聞記者であった筆者の場合は、委嘱を受けた当時はマスコミュニケーションを担う一員としての職能を期待されたのだろうが、退職後も委嘱関係は継続している。一個人のボランティア活動でも構わないのだろうと勝手に解釈しているが、自発的な活動を求められるだけでは、観光大使がその名に恥じない成果を上げることは容易ではない。

奈良市観光大使も、主管課の呼びかけで2年に1度の情報交換会に全国各地から観光大使が集まるが、ほとんどの場合、その場限りの顔合わせに終わっていた。2011年の情報交換会で奈良市在住の大使である村内俊雄氏と出会い、「観光大使が集まる折角の機会なのだから、奈良市の企画に従うだけでなく、相互に交流しよう」と、「奈良の魅力再発見」「奈良の観光をもう一度考える」をテーマに、各大使やゲストを招いて話題を提供しあう場を持つことになった。時期により頻度にバラツキはあるが、4年を経過して13回の「奈良市観光大使交流会セミナー」を開いた。

参考までに、その一覧を示す。

図表Ⅰ：奈良市観光大使交流会セミナー開催記録

回	時期	テーマ	講師	内容
1	2011年10月	仏女が語る奈良	奈良市観光大使 田中ひろみ（イラストレーター）	仏像・寺社仏閣巡りなど多くの著書がある著者に奈良の仏像の魅力を語っていただいた。
2	2011年11月	支店長が語る奈良	奈良市観光大使 西田隆司（富士通㈱奈良支店長） 奈良市観光大使 大野知法（キリンビール㈱奈良支店長）	二人の支店長から、奈良の意外な姿や素晴らしいさを教えていただいた。
3	2011年12月	奈良にうまいもんあり	奈良市観光大使 海豪うるる（料理研究家） 奈良市観光大使 竹内則友（㈱ぐるなび大阪営業所長）	海豪さんからは、奈良には“うまいもんあり”の話。 竹内さんからは多くの人が奈良のうまいもんを知らないという話。
4	2012年06月	奈良観光のリーダーが奈良の観光を考える	奈良の観光のリーダー30人	奈良の観光に関係する諸団体が集まり、行政と民間の枠を越え、情報の発信など今後の課題について検討した。
5	2012年07月	設立1周年記念 奈良市長と明日香村長が語る「奈良の観光の展望」	奈良市長 仲川元庸 明日香村長 森川裕一	奈良県の北部と南部のリーダーの二人に、それぞれ観光の今後について熱く語っていただいた
6	2012年11月	天平の宝宝箱テレビ映像 でみる正倉院	奈良市観光大使 奥田一重（元NHKプロデューサー）	正倉院に初めてハイビジョンカメラが入った時の逸話と、宝物の映像を中心にした解説を聞いた。
7	2013年01月	奈良の観光をもう一度考える	奈良市観光大使 森栄徹（大阪経済法科大学客員教授）	問題点を把握し、提案・提言へ〜まとめの考察。
8	2013年02月	奈良の魅力は何でしょう・・・	奈良市観光大使 塩田正弘（大手前大学教授） 奈良市観光大使 桑原高良（元上毛新聞社編集委員）	情報交換会に集った遠隔地の奈良市観光大使からの報告。
9	2013年05月	ドイツから奈良へ	奈良市観光大使 坂口紀代美（日本美術家連盟彫刻家）	観光から感性・・・奈良にとって何が必要なのかを国際的視点で語っていただいた。
10	2013年11月	天平の宝宝箱テレビ映像 でみる正倉院	奈良市観光大使 奥田一重（元NHKプロデューサー）	正倉院展に時期をあわせた話題を語っていただいた。
11	2013年11月	世界遺産都市スペイン・トレドとの交流	奈良市観光大使 村内俊雄	奈良市の姉妹都市であるトレドとの交流に一役買った観光大使の報告。
12	2014年07月	奈良の観光とアートイベントが果たす役割	奈良県立美術館学芸課長 南城守	アートイベントという観光資源についての報告。
13	2014年10月	天平の宝宝箱テレビ映像 でみる正倉院	奈良市観光大使 奥田一重（元NHKプロデューサー）	正倉院展に時期をあわせた話題を語っていただいた。

2. 奈良市からやって来た八尾市観光団

「セミナー」を主宰する村内氏は居住地（奈良市北登美ヶ丘3丁目）の老人会「北登会」のメンバーでもあり、平成25年から本学教養部の講座「現代社会と観光」に講師として参画いただいている。そうした縁で平成26年5月19日、北登会の有志が「心合寺山古墳と大阪経済法科大学内好太王碑」をテーマに本学周辺を歩く「第28回歴史探訪ハイキング」に同行させていただいた。

来訪者17人は全員が男性で、最高齢者は87歳である。奈良市内はもちろん県内の要所をほとんど渉猟し、歴史遺産や自然景観・生態系、訪ねた先の住人とのふれあい、農産物の特徴や味わいなど、あらゆる事象に通じた経験豊かなグループである。八尾市民である筆者は彼らの観光行動を観察し、これをヒントに、訪れる立場ではなく、迎え入れる側の意識を客観的に考え

る機会にしようと考えた。

八尾市では2013年秋に一般社団法人「八尾市観光協会¹」が設立され、2014年4月17日には「八尾市観光案内所²」が開所したばかりだ。奈良市は面積で八尾市の6.63倍、人口では約10万人多い県都である。圧倒的な数の国宝や重要文化財を抱え、有名社寺も多い。ユネスコの世界遺産に限っても市内に「古都奈良の文化財」、県内には「法隆寺地域の仏教建造物」「紀伊山地の霊場と参詣道」があり、日本を代表する国際観光文化都市³である。訪れる側からみれば両市を同列に並べることはありえないが、受け入れる側に立てば学ぶことは多いはずだ。

この日の「歴史探訪ハイキング」の行程と、筆者が感じた要点を簡略に列記する。

①近鉄大阪線瓢箪山駅～（バス片道250円/人）

瓢箪山の地名に格別の関心はない。駅南西にある瓢箪山稻荷神社境内にある双円墳の姿が地名の由来といわれるが、すでに全員が知っていたようだ。

②楽音寺バス停下車～

楽音寺に該当する寺院が現存しないため、地名にもほとんど関心がない。

③東高野街道⁴～

A) 歩道が片側にしかなく歩きづらい。無秩序な横断が頻発して車両の通行が阻害され、相互に危険を感じる。

B) 街道名は余りにも有名だが、その風趣を偲ばせる光景がもはやない。

④鏡塚古墳⁵～

A) 民家脇の細い通路を伝って入るので分かりにくい。

B) 「奈良の古墳とは違うなあ」の声あり。

C) 墳頂部からの眺望は、東に生駒山系の緑が壁のように立ちほだかり、手前に心合寺山古墳の葺石、本学の白亜の学舎が見える。西へ転じると、「あべのハルカス」が遠くに見えるが、手前にある大阪市環境局八尾工場の煙突高度が目立ち、インパクトに欠けた。

¹ 八尾市及びその周辺地域の観光に関する事業を、市民、事業者、団体、行政が協働して推進し、様々な地域資源を活用して、訪れる人にも住む人にも魅力あるまちであることを発信し、賑わいと交流を創造するため、八尾市と八尾商工会議所が設立時社員として公共交通機関をはじめとする市内事業者に呼びかけ、平成25年11月1日に一般社団法人八尾市観光協会として設立しました。（八尾市HP <http://www.city.yao.osaka.jp/0000025143.html>）

² 人・モノ・自然・食・文化が息づくまち、八尾の魅力をも市民や、市外から訪れる方により知ってもらうことを目的とした情報発信と位置付けられている。（同 <http://www.city.yao.osaka.jp/0000025191.html>）（2015.1.21参照）

³ 国際観光文化都市の整備のための財政上の措置等に関する法律（昭和52年法律第71号）

⁴ 京都から高野山参りをする東側の街道で、この名がつけられているが、地元では京都への道ということから京街道と呼ばれてきた。（八尾市観光データベース 2015.1.21参照）

⁵ 府指定文化財 心合寺山古墳の西方約250mの東高野街道沿いにある古墳時代後期古墳で、墳は南側半分が削られています。直径約28m、高さ約5mの円墳と推定されていますが、前方後円墳とする説もあります。1958年（昭和33）に採土中に、埋葬施設の粘土槨とみられる遺構や石槨のふたの破片、さらに後の時代の火葬跡とみられるものが見つかっています。周辺から出土した円筒埴輪や朝顔形埴輪、蓋形埴輪から5世紀末頃の古墳と考えられ、心合寺山古墳の後の時代に造られた古墳です。入口のところに宝山神社の碑（ひ）があります。[昭和45年12月7日指定]（八尾市文化財情報システム 2015.1.21参照）

⑤しおんじやま古墳学習館（大人200円）～

- A) 館内玄関ロビーの床に敷き詰めた八尾市の航空写真が最初に関心を引いた。ガイドを務める女性スタッフとの会話は、来館者に示すホスピタリティーが体感できる好機であり、高齢者集団の半日の冒険が愉快になるかどうかの分かれ道になる。
- B) 心合寺山古墳⁶の説明は、墳長を基に大阪府内の大仙陵古墳（仁徳陵）や誉田御廟山古墳（応神陵）との比較など、大阪府側で世界遺産を目指す古市・百舌鳥古墳群をも紹介する解説があって興味深い。奈良県からの来訪者にとっては、卑弥呼との関連をいわれる箸墓古墳や景行陵など三輪山麓に広がる古墳群や、佐紀盾列古墳群、馬見古墳群などとの関係性の説明があったほうが、より関心を集めただろう。
- C) 展示物では、夔鳳鏡（きほうきょう）、蓋形（きぬがさがた）埴輪、家形埴輪が注目を集めた。夔鳳鏡という読めても書けそうにない難しい漢字や、蓋形埴輪の大胆かつ奔放な姿形と表現が来館者の心を奪った。
- D) パネル「5世紀の中河内の様子」に描かれた「河内湖」と旧大和川の立体図も関心を集めた。当時の外交窓口であった河内地域の地理的特性に関する知識なくして、日本の歴史や古代社会のありようを理解できないことを知る最初の関門だろう。
- E) 被葬者像が明確ではないのが残念だが、木棺、粘土槨を実寸大に再現したレプリカが見ものだった。被葬者と推定される物部氏について、もう少し詳しい話題が用意されておればピーター・再訪者の来館を期待できるのではないか。

⑥心合寺山古墳（昼食）～

- A) 古墳学習館のスタッフが企画に加わったという「しおんじやま特製 古墳懐石弁当⁷」（税込1200円）が面白かった。だが、「注文は10個以上から、3週間前までに申し込む」という条件は難題である。話題性はあるが、現状では知名度が低い。
- B) 食事後、墳丘上に上がったが、学習館での勉強が十分に行き届いたためか、墳丘の大きさを体感する程度で終わった。むしろ、墳丘上からの眺望、山の頂や近隣の建物・構造物の位置確認に興味に移ったようだ。

⁶ 約1600年前の古墳時代中期に造られた前方後円墳（ぜんぼうこうえんふん）です。大きさは全長約160m、高さ約13mで、中河内で最も大きな古墳です。古墳には、3つの平坦な段があり（三段築成（さんだんちくせい）、平坦な段には3000本以上の埴輪が並べられていたと考えられます。墳丘の斜面全体が、葺石（ふきいし）と呼ばれる石によって覆われていたことがわかりました。（同）

⁷ <http://www.yaomania.jp/eventDetail.asp?p=46>（2015.1.21参照）

⑦花岡山古墳石碑⁸・⑧西の山古墳⁹・薬師石仏¹⁰～

本学と極めて密接な位置にあるが、熊野神社とともに目立たない存在であり、観光的には訴求力がない。

⑨大阪経済法科大学内好太王碑～

A) 本部棟玄関にある秦始皇帝陵の兵馬俑とともに、「なぜ、こんなものがここにあるのか」という意味で関心を集めた。好太王（広開土王）碑のレプリカは韓国に5～6か所あり、筆者も忠清南道天安市の独立記念館で一つを見たが、本学内にあるレプリカは手で触れることができ、刻まれた文字をじっくりと読めるところが素晴らしい。

B) 「百殘新羅舊是屬民由來朝貢而倭以未卯年來渡〔海〕破百殘■■■新羅以為臣民」の部分、しばらくの間、観覧者を釘づけにした。

C) 碑文の記述内容に関して、捏造論議や解釈が定まらないことにも話が及んだ。4世紀ごろの倭と朝鮮半島との関係を記載した碑文の内容と、レプリカとはいえ堂々たる存在感は観光的な価値が高いだろう。

⑩向山古墳¹¹～

目に見えてそれと分かるものがないためか、関心度は低かった

⑪愛宕塚古墳¹²～

A) 分かりにくい場所にあるにもかかわらず、石室内に入れるという非日常的体験ができ、関心度が高かった。

B) 明日香・石舞台古墳との比較で、「石室内がほぼ同等の規模すれば、方や蘇我馬

⁸ 楽音寺の西の山古墳から、南の谷をへだてて、古墳時代前期の前方後円墳の「花岡山古墳」（全長約73m）がありました。この花岡山古墳は元和元年（1615）の大坂夏の陣の際には東軍の井伊直孝の陣地となり、徳川秀忠も立ち寄ったということです。残念なことに昭和30年代に破壊されてしまいました。【出典：『中河内歴史探訪の道』（中河内地域広域行政推進委員会、2006年）を参考】石碑は、大阪経済法科大学構内にある。（八尾市観光データベース2015.1.21参照）

⁹ 古墳時代前期に造られた、前方部を南に向けた前方後円墳です。全長55m、後円部径27m、高さ9m、前方部23m、高さ5mを測ります。楽音寺の村落がこの地の東の山麓にありました。古墳のある丘が「西ノ山」と呼ばれていたところから、古墳名として残っています。明治14年（1881）、開墾中に後円部から朱塗りの石室（おそらく堅穴式石室）が発見され、中から人骨、勾玉、刀剣、銅鏃、鏡、玉類などが出土したと伝えられています。南の谷をへだてて、同じく古墳時代前期に造られた前方後円墳の「花岡山（はなおかやま）古墳」がありました。（八尾市文化財情報システム 2015.1.21参照）

¹⁰ 高さ115cm、幅63cmの舟形背骨に、像高71cmの薬師如来立像を半肉彫りしています。右手をあげて施無畏印を結び、左手は胸前で薬壺を捧げ持っています。石材は凝灰岩で、古墳時代の組合式家型石棺の底石を使用して造られた石棺仏です。もとは西ノ山古墳西側の熊野神社境内にありました。像の周囲にある十五の梵字は、薬師曼荼羅をあらわし、作風からみて室町時代後期のものであると思われる。（同）

¹¹ 向山古墳は、心合寺山古墳の東方にあり、「楽音寺・大竹古墳群」の首長墓のひとつです。心合寺山古墳より前の時代である古墳時代前期に造られた古墳と考えられています。丘陵を利用して設けられた西向き全長55mの前方後円墳と考えられます。墳丘は早くから開墾されて植木畑となり、後円部の一部が削られています。埋葬施設の構造や埴輪の使用はわかっていません。（同）

¹² 府指定文化財 古墳時代後期（約1450年前）に造られた円墳で、墳丘の大きさは直径約22.5m、高さは約9mあります。埋葬施設は、石材を積み上げた両袖式の横穴式石室と呼ばれるものです。全長15.7m（玄室長7m・玄室幅3.1m・羨道長8.7m・羨道幅2.1m）あり、石室内の広さは約11畳分の大きさがあり、奈良県の明日香村にある石舞台古墳に匹敵する大きさです。大阪府下では最大級の横穴式石室で、有力な人物のお墓であったと考えられます。【おもな出土品】昭和41・42年の発掘調査では、凝灰岩と竜山石製の2種類の石材の組合式の冢形石棺の破片や、ねじり環頭大刀、龍の模様が施された飾り金具をもつ大刀、鉄地金銅張りの馬具、ガラス玉の首飾り、須恵器など古墳の規模にふさわしい出土品が見つかっています。〔平成4年3月31日指定〕（同）

子なら、こちらは物部守屋に繋がる先祖の墳墓か」と興味津々の様子だった。

- C) 小山状の封土で石材の大きさが分からないが、説明と周知方法次第で石舞台古墳に匹敵する観光資源になりうるだろう。しかし、駐車場などアプローチに難がある。

⑫玉祖神社¹³～

- A) この地で「高安薪能」が毎年行われていることが驚きをもって受け止められた。年配者も、ここが高安流能の発祥地であることを知る人はいなかった。
- B) 慶長の石灯籠も注目されたが、能に登場する在原業平と、能・狂言が成立した時期、慶長という豊臣～徳川の時代と隔たりが大きく、混乱を来した様子もあった。
- C) 観光資源として、在原業平、伊勢物語、能楽の知識をとりまとめたパンフレットや、目に見える形での展示に工夫と投資をすれば、年配者のハイキングコースとして存在感が高まるのではないだろうか。

⑬伴林光平¹⁴墓～

国学者であり歌人というが、尊王攘夷や天誅組との関連を知る人は少ない。

⑭本間孫四郎¹⁵墓～

中世・南北朝時代の人であり、なじみが薄く関心度は低かった。

⑮都夫久美神社¹⁶～

「物部氏の祖神の宇摩志摩治命」の説明に、「ここもまた物部か」との反応があった。幼い厩戸皇子（聖徳太子）と蘇我馬子の関係、日本書紀が伝える「丁未の変¹⁷」の記事は、聖徳太子が多くの日本人に親しまれているにもかかわらず、認知度が低い。物部

¹³ 式内社で玉祖明神とか高安明神ともいいます。高安十一カ村の氏神で、和銅三年（710）周防国（現在の山口県）から分霊を勧請したもので、祭神は櫛明玉命です。玉造部の人々の祖神をまつたものであるといわれています。神社の北側を通る十三街道は、大阪の玉造に通じ、玉祖・玉造の地名から何らかの関連があったと考えられます。神社の宮寺として石段下に「菌光寺」がありましたが、明治初年の神仏分離の際に廃寺となりました。境内には豊臣秀頼寄進の石灯籠などがあります。（同）

¹⁴ 伴林光平が住んでいた教恩寺の跡に、大正3年（1914）に建てられたもので、「贈従四位伴林君光平碑」と刻まれています。文化10年（1813）、志紀郡林村（現在の藤井寺市）の尊光寺で生まれた光平は、西本願寺等で仏教の修行に励み、その後、国学・和歌を学びました。弘化2年（1845）から16年間、若江郡成法寺村（八尾市南本町）にあった教恩寺の住職となり、顕証寺や大信寺などで歌道指南役を務め、奈良の興福院や中宮寺の歌会に参加する等、和歌や国学を教えていました。また、大和や河内の古墳の調査を行い、『大和國陵墓檢考』、『野山のなげき』など数多くの書物を執筆しています。図画とともに字名や村人の言い伝えを記録しており、当時の古墳の状況が分る貴重なものとなっています。尊皇攘夷運動に傾倒していた光平は、文久3年（1863）8月の天誅組決起に際し、記録方として参加しましたが、戦いに敗れ処刑されました。奈良への通い道であった十三街道（玉祖神社西方）にも追悼の墓碑があります。（同）

¹⁵ 孫四郎忠彦は、新田義貞の家臣で、弓の名人であったと伝えられています。延元元年（1336）五月、西国から大軍を率いて都へ攻め上る足利尊氏を、打出の浜でむかえ撃ったといわれています。その後、八尾の神立の住人となり、本間垣内という小字名が残っています。二基の五輪塔は、孫四郎の墓と伝えられています。向かって左側の五輪塔は総高152cmと大きく、完存しています。これに対して右側の五輪塔はやや小型で、空・風輪は別石で後補です。どちらも、鎌倉時代後期から南北朝時代頃の造立だと思われます。（同）

¹⁶ 物部氏の祖神の宇摩志摩治命を祭神とします。式内社の神社で都夫久美という社名は、物部氏一族の積組連に由来します。明治40年（1907）12月6日、神社統合で玉祖神社に合併されました。御神体は玉祖神社に移され、社殿は佐麻多度神社の境内末社である佐麻多度天満宮の本殿として移築されました。その後、昭和49年10月13日、65年ぶりに社殿を新築し、御神体も玉祖神社から帰ってきました。（同）

¹⁷ 日本書紀卷第廿 泊瀬部天皇 崇峻天皇

守屋終焉の地とされる大聖勝軍寺¹⁸の存在や、河内が物部の郷であり、古代豪族支配の時代が終わり、日本の官僚的政治体制が整い始める飛鳥時代への架け橋としての八尾・河内地域の意義に理解が深まれば、観光行動の一大動機である歴史的関心の部分で、八尾市が明日香村や奈良市と対等以上の存在になれる可能性に期待したい。

⑩高安松の馬場～

- A) 知名度が低く、アプローチが極めて悪い。玉祖神社の大鳥居とセットにして、ようやく訪れる人があるかどうか。単独では観光資源としては弱い。
- B) 中河内・八尾の地が、まずは古代史上の重要な位置を占めるところから始まり、中世、近世にも脈々と足跡を残す歴史性にまで関心を広げることは望ましいが、多くを望んでもインパクトを欠きかねない。

⑪大竹バス停～（バス）～近鉄大阪線瓢箪山駅

- A) 片道250円／人（ダイヤ通りの定時運行にやや難あり）。
- B) 高低差がある行程だが、耐えられないほどの辛さではない。しかし、弁当を広げ、用を足し、西の大阪平野を見渡し、腰を下ろして休む場所が極めて少ないのが辛い。旧170号線（東高野街道）まで降りてこなければコンビニエンスストアさえない。

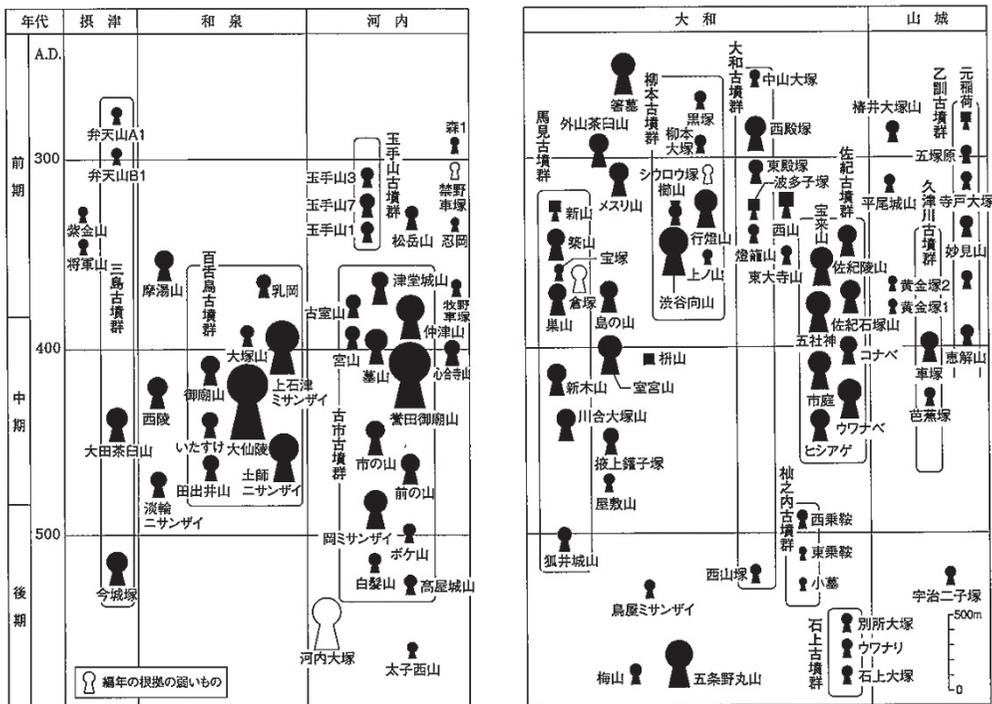
3. 古墳を手掛かりに歴史観光を考える

高齢世代の観光行動を誘う要素として、歴史的関心と目に見える事跡が大きなウエイトを占めることは改めていうまでもない。鏡塚古墳や心合寺山古墳で「奈良の古墳とは違うなあ」という感想が聞かれたが、愛宕塚古墳では、入れ代わり立ち代わり、喜々として石室内へ入り込む姿が見られた。単なる知識としての見聞に止まらず、体感する経験が訪問者の好奇心を掻き立てたに違いない。「奈良の古墳とは違う」という言葉は、視覚的なスケール感の違い、遠くから見た際の大きさの違いから出た感想だろう。

彼らの雑談の中に「例えば仁徳陵（墳長486メートル）などは大き過ぎて傍へ行っても何があるのかよく分からない」「それに比べて応神陵（同425メートル）は高速道路（西名阪自動車道）から見ると大きさがよく分かる」という会話ががあった。両古墳が国内で1、2番目に大きい前方後円墳であるという知識、それに伍する古墳が奈良では随所にみられるという体験、加えてしばしば見かける航空写真が個々の印象を形成していると考えられる。

¹⁸ 棕樹山大聖勝軍寺と称し、高野山真言宗に属します。河南町の叡福寺の「上の太子」、羽曳野市の野中寺の「中の太子」に対して、「下の太子」と呼ばれています。聖徳太子が物部守屋との戦いにあたって、信貴山の毘沙門天に祈願し四天王をまつり、その加護により戦に勝ったので、この寺を建てたと伝えられます。門前に「守屋池」、付近に「鎬矢塚」、「弓代塚」、「物部守屋のお墓」があり、聖徳太子に関連する史跡があります。天文二十二年（1553）には、京都の公卿 三条西公条が、吉野詣での帰途ここに参詣し、特に許されて秘仏である植髮太子像を拝したと伝えられています。本尊は「木造二臂如意輪観音思惟半跏像（府指定文化財）」で寺宝も多くあります。（八尾市文化財情報システム 2015.1.21参照）

そうした意味で、筆者は同年8月、鳥根県立古代出雲歴史博物館で「企画展・倭の五王と出雲の豪族¹⁹」を観覧して大変驚かされた。ヤマトとイヅモの関係について大胆な発想を示していたこともあるが、とりわけ会場内に掲示された写真に目を奪われた。「箸墓古墳と三輪山」「佐紀盾並古墳群（西群）」「百舌鳥古墳群の大王墓」「古市古墳群の大王墓」と数々の空撮写真が展示室へ導く通路に掲げられていた。と同時に「畿内における大型古墳の編年」という大型図表²⁰にも感心した。これらを鳥根県の地で見ることになるとは想像もしていなかった。



図表Ⅱ：畿内における大型古墳の編年（「企画展・倭の五王と出雲の豪族²¹」図録より）

図表は、横軸が左から右へ摂津、和泉、河内、大和、山城という地域区分、縦軸は古墳時代前・中・後期の区分と紀元後300年、400年、500年の罫線を加えた時間軸で構成されている。その上に前方後円墳の大きさを視覚的に表したアイコンを載せてあり、まるで全古墳を上空から俯瞰する趣である。これまで幾つかの書籍で様々な編年図を数多く見てきたが、整理の妙というべきであろうが、今回の図表を見て目の前の霧が晴れたような気分になった。

¹⁹ 会期は2014年7月25日～9月15日

²⁰ 同展図録（P.7）から引用

²¹ 会期は2014年7月25日～9月15日

4. 八尾市の観光戦略を考える

前記の体験をもっともう一度八尾の観光戦略を考えると、この図表を現物の古墳に置き換えて自らの目で見ることができる基盤が、八尾市にはすでに揃っていることに改めて気付いた。

八尾空港は古くからある一般航空の拠点である。陸上自衛隊中部方面航空隊八尾駐屯地、大阪府警察航空隊、大阪市消防局航空隊のほか、民間の朝日航空（株）、朝日航洋（株）、アジア航測（株）、大阪航空（株）、共立航空撮影（株）、第一航空（株）、東邦航空（株）、中日本航空（株）、（学法）ヒラタ学園、（株）ノエビアアビエーションという10社・法人が利用²²している。業務は航空測量調査、操縦練習・パイロット養成、取材報道、広告宣伝、送電線等点検、物資輸送であり、うち、朝日航空（株）、大阪航空（株）、第一航空（株）の3社が遊覧飛行を業務としている。

朝日航空（株）は最も長い50分間の京都コースで大人1人23,500円、大阪航空（株）は35分間の神戸コースで飛行機44,000円、ヘリコプター84,000円、第一航空（株）は40分間の奈良名所目口で大人1人37,500円（大人3人の場合10,000円OFF）などを各社のホームページに掲げている。いずれも操縦士を含めて登場4人、乗客は3人が標準のようだが、固定翼機（セスナなど）と回転翼機（ヘリコプター）の違いや、人数、飛行時間の長短など条件が異なる例示なので比較しにくいだが、おおよその目安がわかる。

いずれも、仁徳陵はモデルコースに含まれているようだが、各社とも歴史観光と結びつけた誘客はあまり積極的には行っていないようである。2014年5月に八尾空港の某社を訪れたところ、「遊覧飛行はクリスマスシーズンにカップルが利用することが多い」と聞かされた。だが、そのすぐ脇で祖父と孫らしい2人連れが遊覧飛行を申し込んでいた。「事前の予約はできず、当日、機体があれば即刻、飛び立てる」といい、週末を中心に年間200組前後の実績だという。売り上げにして年間1000万円に満たないこともあり、主たる業務とは位置付けていない様子だった。

ところで、仁徳陵、応神陵は「百舌鳥・古市古墳群」として世界遺産の国内暫定リスト（推薦待ち候補）に上がっているのは多くの人が知るところである。両古墳群だけなら八尾空港からは文字通りひとつ飛びである。そこに、先に挙げた「畿内における大型古墳の編年」に従い、摂津、大和、山城を加え、大小の前方後円墳群の一大スペクタクルの連鎖を上空から眺める遊覧飛行ができれば、古代史ファンはもちろん、ファンならずともどれほど楽しいだろうか。国内だけでなく、近隣アジア諸国、欧米の旅行者にとっても魅力的な観光資産ではないだろうか。

費用が割高であることに加え、40人規模のバス旅行に比べれば1回3人までという規模の観光は効率が悪いかもしれない。しかし、世界の観光地を視野に入れば、固定翼、回転翼にバルーンを加えた「Scenic flights」は、おそらくほとんどの地域でオプションツアーの一つとして選択できるのではないかと。有名な「ナスカの地上絵」（ペルー）、「ピラミッドとスフィンクス群」（エジプト）などがたちどころに想起できる。日本の巨大前方後円墳は知識としては知られて

²² 国土交通省・八尾空港供用規定 <http://ocab.mlit.go.jp/news/kanri/pdf/yao.pdf> (2015.1.21参照)

いても、目で見るとしては全くといっていいほど認知されていない。ここにチャンスが潜んではいないだろうか。

空からの遊覧は地上の遺跡等に環境的な悪影響をもたらさないうえ、一度に大量の人員を移動させるわけではないから、空港周辺の交通環境や市民の生活環境にも大きく影響しない。逆に考えれば、大規模な投資を必要とせず、「八尾に来れば遊覧飛行ができる」ことを広報・広告するだけで集客ができる。

「2020年をめどに訪日外国人を200万人に」とうたう政府の観光立国政策が夢ではないという状況²³において、八尾空港の現状として、1社で年間200組、3人乗機で最大600人、これを平均値とみて3社で1800人の誘客は取るに足りない数のようにみえるが、「日本の八尾市に行けば、世界最大の墳墓を含む古墳群と、古代日本の宮都の地を空から一望できる」というメッセージを世界に投げかけることで、日本ブランド、八尾ブランドを高めることはあっても妨げになることはない。

空からの観光を果たした観光客は、必ず八尾空港に降り立つ。非日常的な感動・感激の体験を何かの形にして持ち帰りたいと思う観光客の心理に応え、記念品などを販売する事業も可能だろう。「上空から見たら、次には地上から確かめたい」という次なる観光動機を触発しうる。高速道路や鉄道という既存交通の面でも八尾市は有利な立地に恵まれている。

例えば聖徳太子の物語を取り上げても、「飛鳥に先立つ八尾・河内」というフレーズで、「八尾の地は、空からでも地上をたどっても、日本古代史への入り口」と位置付けて、さらに八尾ブランドの高揚を図ることもできよう。現状の大聖勝軍寺やその周辺の聖徳太子ゆかりの地は、国道25号線沿いにある観光バスで乗り付けたという観光行動には適していないが、時流はスモール・ツーリズムである。八尾で学び、四天王寺や法隆寺、飛鳥を訪ねる起点とする。こんな歴史観光のありようを積極的に提案すればいいのではないか。

地元の八尾市、八尾市観光協会は八尾空港の航空事業者をはじめ関係事業者や市民に協力と参画を呼びかけて調整を図り、学校教育では日本史の中で特異なウエイトを持つ八尾・河内への誇りと関心を喚起して、郷土への愛着と学習意欲を高めることができるだろう。「八尾ブランド」が効果を発揮し始めたら、八尾観光に勢力を注いでこられた多くの人々の努力と成果が、より一層弾みをつけて動きだすものと期待を膨らませたい。

²³ 観光庁発表2015年1月20日「訪日外国人消費動向調査 2014年 年間値（速報）～訪日外国人旅行消費の総額は2兆305億円で過去最高！～」、2015年1月21日付新聞各紙朝刊